
「平成28年度 飼料用米多収日本一」 受賞者の取組概要

【単位収量の部】

農林水産大臣賞

1 有限会社 平柳カンントリー農産（宮城県）

政策統括官賞

2 新山 実（秋田県）

全国農業協同組合中央会会長賞

3 三日市営農組合（富山県）

全国農業協同組合連合会会長賞

4 佐々木 隆（山形県）

協同組合日本飼料工業会会長賞

5 原田 芳和（宮崎県）

日本農業新聞賞

6 地崎 啓（富山県）

【地域の平均単収からの増収の部】

農林水産大臣賞

1 有限会社 平柳カンントリー農産（宮城県）

政策統括官賞

5 原田 芳和（宮崎県）

全国農業協同組合中央会会長賞

6 地崎 啓（富山県）

全国農業協同組合連合会会長賞

2 新山 実（秋田県）

協同組合日本飼料工業会会長賞

3 三日市営農組合（富山県）

日本農業新聞賞

7 山田 奈々（滋賀県）

1 有限会社 平柳カントリー農産(宮城県加美郡加美町)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
夢あおば	約2.3ha	932kg/10a	387kg/10a(545kg/10a) [※]

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 昭和50年に平柳営農集団組合を発足させ、地域の7戸の農家で当法人を平成15年に設立。
- 耕種作物のほか、きのこ(えのきだけ)を栽培
あひこひろみ
- 代表取締役社長:我孫子 弘美
- 構成員[H28]:7名(雇用12名)

【作付品目】

- ・主食用米:ひとめぼれ、金のいぶき等 計5品種 18.3ha
- ・飼料用米:夢あおば 2.3ha
- ・大豆:ミヤギシロメ 18.8ha
- ・種子用:夢あおば、東北211号 4.2ha

※えのきだけを年間510トン栽培

【取組のきっかけ】

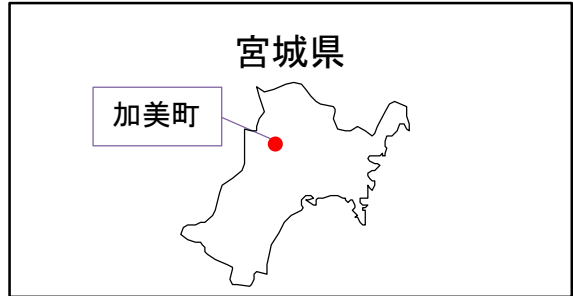
- 大豆作後の稲の倒伏対策として、平成20年から飼料用米(夢あおば)に取り組む。

【取組概要】

- 大豆作後に飼料用米を作付け、土壌窒素を有効活用。また、牛ふん堆肥(2t/10a)とえのきだけ栽培で発生する廃培土を原料とした堆肥(1t/10a)を施用し、化学合成肥料の使用量を低減。
- 疎植栽培(慣行70株/坪⇒50株/坪)で育苗箱を慣行の30枚/10aから18枚/10aに削減。
- 元肥は、移植時に窒素1.2~1.5kg/10aを側条施肥。追肥はしていない。
- 中干し(6月下旬~7月中旬)完了2日後に溝切りを実施し、用水・排水を円滑化。
- 通水期間の最後(9月中旬)に湛水し、止水することで品種が本来必要な登熟期間を確保し未熟粒発生を低減。
- バラ集荷に対応しているJA加美よつばの飼料用米専用のカントリーエレベーターに乾燥を委託し、全量を2tダンプによるバラ輸送とすることで、包装資材費及び労働費を削減。



佐々木専務 我孫子社長



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
秋田63号	約2.5ha	897kg/10a	284kg/10a(613kg/10a) [※]

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族3人(本人、妻、息子)で経営する専業農家。
- 大豆を中心とした複合経営
- 近隣の8農家で「ニツ橋ライスセンター」を設立し、共同で乾燥調製

【作付品目】

- ・主食用米:あきたこまち、萌みのり 4.1ha
- ・飼料用米:秋田63号 2.5ha
- ・大豆:リュウホウ 11.5ha
- ・小麦+そば(後作) 5.1ha

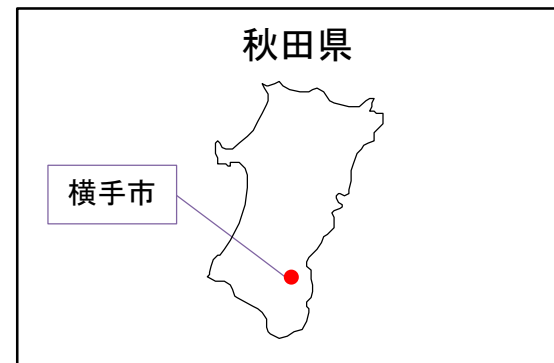
※水稲、大豆、そばの3年4作の輪作体系

【取組のきっかけ】

- 米価が下落傾向の中、面積拡大に対応した作業体系の確立と経営の安定化を図るため、飼料用米の数量払いが導入されたことを契機に平成26年から多収品種(秋田63号)により飼料用米に取り組む。

【取組概要】

- 耐倒伏性に優れ、いもち病にも強く、作期が晩生である多収品種の秋田63号を導入し、主食用米(あきたこまち)との作期を分散。
- 栽植密度は、疎植栽培(株間を広げて栽植密度を下げる)により、慣行の70株/坪から50株/坪に減らし、播種から田植えまでの資材費及び労働費を低減。
- 追肥は、穂数増加を目的として、窒素成分を多く含んだ肥料の中でも比較的安価な肥料(20kg袋あたり、N4.6kg、K4.6kg)を7月15日と7月25日にそれぞれ6kg/10a施用。
- 一台の汎用コンバインで、自らが生産する米、大豆、麦及びそばの収穫を行い、農機具費を低減。
- 乾燥・調製後は、全てフレキシブルコンテナで、自らJA秋田ふるさとへ全量出荷。包装容器代や運搬経費を節減。



3 みっかいち 三日市営農組合(富山県高岡市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
やまだわら	約4.2ha	865kg/10a	273kg/10a (592kg/10a) [※]

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 高岡市福岡町三日市地区の6戸からなる集落営農組織として平成8年度に設立。
あらき つぐまさ
- 組合長: 荒木 嗣正
- 構成員[H28]: 6名

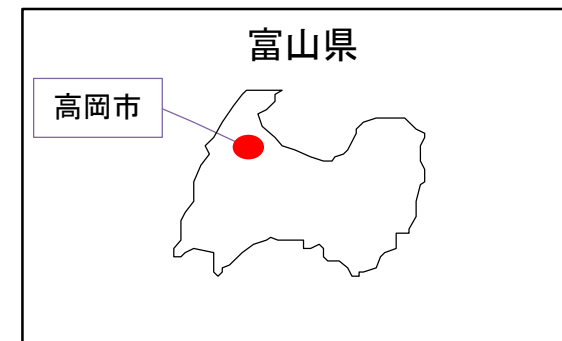
【作付品目】

- ・主食用米: コシヒカリ 10.3ha
- ・飼料用米: やまだわら 4.2ha



【取組のきっかけ】

- 大豆の低単収が課題となっていたことや、地域JAからの勧めがあったことから、平成27年から一部、大豆に代えて飼料用米を作付け。主食用米と同じ機械装備で生産できることや、収量も良かった(27年産: 790kg/10a)ことから、28年は本格的に飼料用米に取り組んでいる。



【取組概要】

- 肥培管理は、主食用米(コシヒカリ)と同様に基肥として肥効調節型肥料(20kg袋あたりN4.2kg、P2.8kg、K2.8kg)を40kg/10a施用し、稲体診断(葉色、草丈等)による適期の追肥(硫安7kg/10a(出穂前))、適切な病害虫防除及び水管理等により高収量を確保。(27年産: 790kg/10a、28年産: 865kg/10a)。
- 当該地区は、地力の低い地帯であることから、土づくりとして毎年、鶏糞堆肥及びケイカル(ケイ酸資材)を、慣行の施用目安の1.5倍(150kg/10a(3月下旬~4月上旬))施用。
- 「やまだわら」が、漏生イネとして主食用米に混入することを防止するため、飼料用米は固定して作付け。
- ほ場の水管理
入水(代掻き(4月下旬))→湛水管理(田植期(5月上~中旬))→中干し(6月中~下旬)→間断かん水→飽水・湛水管理(幼穂形成期~登熟期)→落水(9月中旬)→収穫(10月上旬)

4 ささき たかし 佐々木 隆 (山形県酒田市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ふくひびき	約1.0ha	869kg/10a	239kg/10a (630kg/10a) [*]

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 平成19年に集落営農組織として設立された東平田ファーム(構成員169名)の構成員となり、組織に委託された農地の一部を農業機械オペレーター等として肥培管理を実施。

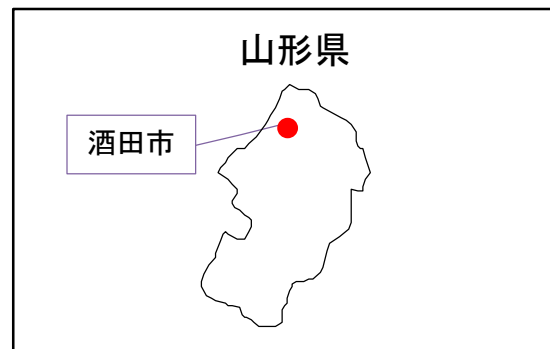
【作付品目】

- ・主食用米:(はえぬき、つや姫、ひとめぼれ) 3.5ha
- ・飼料用米:ふくひびき 1.0ha
- ・加工用米:はえぬき ひとめぼれ 1.0ha
- ・米粉用米:はえぬき 0.2ha
- ・大豆:エンレイ 0.1ha



【取組のきっかけ】

- 地元JAが、生協や畜産農家等と連携して飼料用米の生産・利用に取り組んでおり、多収品種「ふくひびき」での飼料用米の作付けを推進。JAの勧めに応じて平成27年から飼料用米に取り組む。



【取組概要】

- 上位3葉の葉長の計が1m以内であれば、太陽光を地面まで届かせることができ、稲の根張りがよく、整粒もみ数の増加(登熟歩合の上昇)が見込めるといふこれまでの研究及び経験から、土壌分析データ等を基に基肥の施肥量を調整(10aあたり投入量、N6kg、P6kg、K6kg)。
- 追肥は、尿素の単肥を使用することで費用を抑え、4kg/10aの施用量を基本として、上記の葉長の管理など生育状況に合わせて施肥量を調整。
- ほ場は大豆の後作であり均平となっていなかったが、除草剤の効果を確認なものとするため作付前にトラクターダンプで土を移動し、田植え前に追加で代掻きを行うことで、念入りに均平化を図り、除草剤は田植え後の1回のみで確実に効かせることができた。また、殺虫剤・殺菌剤についても、慣行栽培では合計4回散布のところを2回に低減。

5 はらだ よしかず
原田 芳和(宮崎県えびの市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ミズホチカラ、ホシアオバ、北陸193号	約1.0ha	890kg/10a	330kg/10a(560kg/10a)※

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人、妻、子2人)
農繁期に期間雇用延べ5名
- 収穫作業(10ha)、乾燥・粳摺り作業(120t)を受託

【作付品目】

- ・主食用米:ヒノヒカリ 10ha
- ・飼料用米:ミズホチカラ等 1ha
- ・加工用米:み系358 2ha
- ※冬作としてイタリアンライグラス2haも栽培

【取組のきっかけ】

- 飼料用米を地域内で生産・利用する循環型サイクルの構築が重要と考え、平成27年から取り組む。

【取組概要】

- 多収を実現するため、特に土づくりに力を入れ、栽培ほ場に豚糞堆肥2~3t/10aを散布。堆肥は、循環型サイクルの一環として、えびの市内の畜産農家からあえて有償で商品(堆肥)として購入(約2,000円/t)することで、良質な堆肥生産と継続的な耕畜連携を実現。
- 化成肥料による基肥(10aあたりN8.4kg、P8.4kg、K8.4kg)と、追肥(10aあたりN2.8kg、P2.8kg、K2.8kg)2回(穂肥(8月)、実肥(9月下旬))を行うことで、多収を実現。
- いもち病抵抗性の品種特性を活かして、防除回数を地域慣行より2回減らし、地域慣行と比べ農薬費約4割削減(実証ほ場の成果)。
- 作期の異なる品種の作付けで、田植えや収穫等の作業を分散。その際、飼料用米は主食用米より先に移植し、最後に収穫することで、品種特性を踏まえた生育期間を確保し、多収を実現。



6 地崎 啓(富山県高岡市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
やまだわら	約2.1ha	882kg/10a	290kg/10a(592kg/10a) [※]

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(常勤:本人、農繁期の期間雇用(両親、姉))

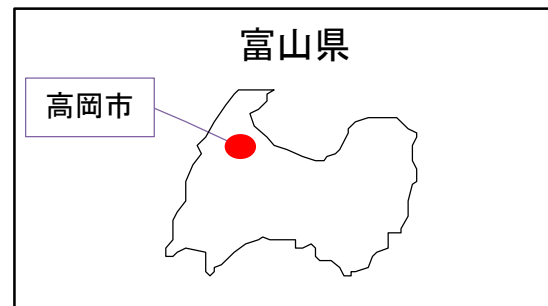
【作付品目】

- ・主食用米:コシヒカリ、てんこもり、とみちから 13.0ha
- ・飼料用米:やまだわら 2.1ha
- ・大豆:エンレイ 5.5ha
- ・大麦:ファイバースノウ 2.0ha



【取組のきっかけ】

- 2年3作体系(水稻-大麦-大豆)を基本としていたが、山際のほ場は重粘土壌のため排水性が悪く、大麦や大豆の栽培には不利であった。このため、平成28年から排水条件の悪い山際のほ場を中心に飼料用米(やまだわら)に取り組む。



【取組概要】

- 大豆後作のほ場では、土中窒素成分が多くなることから、他のほ場の主食用米及び飼料用米に比べて基肥(20kg袋あたりN4.2kg、P2.8kg、K2.8kg、肥効調節型肥料)を2割削減(21kg/10a⇒17kg/10a)。
- 除草剤は、主食用米の慣行栽培より1回減らし、初期・中期除草剤田植え同時処理のみとしている。
- 生産コスト低減に取り組む一方で、飼料用米であっても良質なものを生産したいとの強い意志から、主食用米と同様に土壌改良資材として発酵鶏糞(100kg/10a(3月下旬~4月上旬))の施用、稲体診断(葉色、草丈等)による適期の追肥(硫安10kg/10aを2回に分けて施用(出穂前))、適切な病虫害防除及び水管理等により高収量と同時に品質を確保。
- ほ場の水管理
 入水(代掻き(4月下旬))→湛水管理(田植期(5月上~中旬))→中干し(6月中~下旬)→間断かん水→飽水・湛水管理(幼穂形成期~登熟期)→落水(9月中旬)→収穫(10月上旬)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
北陸193号	約2.4ha	823kg/10a	272kg/10a(551kg/10a) [※]

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族4人(本人、夫、両親)で農業を経営する兼業農家。
- 水稻専作で、経営面積約5ha

【作付品目】

- ・主食用米: 夢ごこち、しがはぶたえもち滋賀羽二重糯 2.5ha
- ・飼料用米: 北陸193号 2.4ha



【取組のきっかけ】

- 小規模集落で離農者が増える中、不作付地解消及び収益増加のため、借地を含む農地において、平成26年産から主食用品種(日本晴)で飼料用米に取り組む。
- 平成27年産から、出荷先の商系事業者(米・資材卸)の薦めもあり、倒伏に強く、多収である北陸193号の栽培に取り組む。

滋賀県



東近江市

【取組概要】

- 北陸193号は主食用米より早く定植し、主食用より遅く収穫することで、品種特性を踏まえた十分な生育期間を確保し未熟粒を減らして収量を増加。
- 施肥は元肥として窒素分30%の緩効性肥料を田植と同時(5月3~5日)に53~55kg/10a施用し、幼穂形成期の少し前(7月13~16日)に追肥することで株の根張りを向上。追肥の施肥量は、過去の施肥量と収穫状況を分析・参考とし、ほ場ごとに調整のうえ、安価な単肥(硫安)をほ場ごとに5~15kg/10a施用。
- 6月中旬に確実な水切り作業を行い、最高分けつ期の直前に十分な落水を行い、倒伏防止及び根の活性化を図った。
- 育苗は簡易水槽を使い、プール育苗を行うことで、労働時間を低減。
- 防除は省力化のため、育苗箱施用と除草剤の田植7日後散布の2回に削減。
- 収穫後1週間以内にもみがらを散布し、わらと併せてすき込み、12月末までに再度のすき込みを行うことで良質な土づくりを実施。